

『探偵は BAR にいる』における電話についての考察

榊貴登

『探偵は BAR にいる』（橋本一監督、2011年）は、東直己のハードボイルド小説『バーにかかってきた電話』を原作とする映画である。本論では、本作における登場人物と電話というメディアとの関係に注目し、考察を行いたい。

まず、本作の物語内容を簡単に説明する。名前が明かされない主人公は、札幌のススキノで探偵をしている。ある日の夜、探偵がいつも通っているバーで酒を飲んでいて、マスターから黒電話を渡される。探偵は電話に出る。それは、コンドウキョウコと名乗る女からの依頼の電話だった。探偵は女の依頼を受けて実行するが、謎の男たちに殺されかける。探偵と助手の高田は調査を始める。そんな時、探偵は高級クラブで沙織という美人ママに出会う。そして、沙織の夫の霧島は、霧島グループという有力企業の社長だったが、一年前に殺されたということを知る。調査を進めていた探偵は、一昨年起きた放火事件で、近藤京子という女性が死んだこと、近藤京子が霧島の娘であったことを知る。その後、探偵と高田は更なる事件に巻き込まれていく。

本作の主人公である探偵は、コンドウキョウコと名乗る女と、沙織という美しい女性に翻弄され、何度も危険な目に合う。また、フラッシュバックや主人公のボイス・オーバーなどを使って展開されるシーンが多い。ボイス・オーバーに関しては、単に物語を説明するためだけに使われているのではない。探偵がコンドウキョウコからの電話に怒りをぶつけるショットに、「俺は調査結果を紳士的に報告した」という声を被せるなど、探偵の主観的な解釈や、自嘲的な語りなどが混じっているように思われる。したがって、本作はフィルム・ノワールの要素を取り入れており、コンドウキョウコと沙織は「ファミ・ファタール」だといえるだろう¹。

実は物語の終盤で、コンドウキョウコの正体が沙織であることが明らかになる。しかし、ボイス・オーバーでの探偵の語りは、「コンドウキョウコ」と「沙織」という名前を使い分けている。確かに、これには観客に真実を明かさないようにするという目的があると思われる。けれども、探偵とファミ・ファタールをつなぐ電話に注目することで、異なる考え方ができるように思うのだ。

本作では、バーの黒電話にコンドウキョウコからの電話がかかってくるシーンが6回描かれる。まず、初めて電話がかかってくるシーンを見てみよう。キョウコが「あなた、ケータイ持ってないの？」と訊くと、探偵は「ない。束縛されるだけで、何の役にも立たないからな」と答える。キョウコは「それでよく探偵なんかやれるわね」と言う。探偵が怒ったような口調で「余計なお世話だ」と言った時に、電話が切られる。「俺はコンドウキョウコに腹を立てた」というボイス・オーバーが被さる。このシーンからは、探偵がケータ

イを持つ気がないことや、キョウコを快く思っていないことなどが分かる。

しかし、物語が進んでいき、キョウコと電話でのやり取りを重ねていくうちに、探偵は変わっていくのだ。5回目の電話のシーンで、「バーにいなきやつかまらないくせに」とキョウコから言われた探偵は、「ケータイ持つよ」と言う。キョウコが「主義を変えるの?」と訊くと、探偵は「依頼人を守るためなら」と答える。6回目の電話のシーンを見てみよう。このシーンは、黒電話が鳴る音に、「コンドウキョウコから最後の電話がかかってきた」というボイス・オーバーが被さって始まる。キョウコは探偵に、小樽に行って見張りをしてくれと依頼する。依頼を受けた探偵は「ケータイを買ったよ。何かあったら、いつでも連絡してくれ」と言う。キョウコは「分かった」と言う。バーの黒電話にこだわっていた探偵が、ケータイを持つようになったのだ。

吉見俊哉は、メディアとは「身体が世界に関わる仕方を構造化する制度」であり、「メディアの変容は、世界を思考する技術の変容」であると述べている²。本作でも、探偵が使うメディアが黒電話からケータイに変わったことで、探偵と世界との関係、あるいは探偵とファミ・ファタールとの関係が変化したと思われる。

それでは、バーの黒電話を介した、探偵とコンドウキョウコとの関係について考えてみたい。探偵が黒電話でキョウコと話すシーンの映像は、電話で話す探偵を映したショットか、探偵のフラッシュバックのショットで構成される。キョウコ（沙織）を映したショットは皆無である。冒頭で霧島が殺されるシーンで、犯人の手元のアップショットを入れたように、キョウコの正体が沙織だと観客に明示しないように、沙織の一部を映したショットを入れることはできるはずだ。しかし、キョウコという存在は電話の声だけで描写される。キョウコに対する観客の情報量を、探偵のそれと同程度に制限していると思われる。探偵もキョウコの姿を見ることはできず、電話で声を聞くしかないからだ。よって、探偵にとってキョウコとは、バーの黒電話を使うことでしか接触することができない存在だといえるのではないだろうか。

次に、ケータイを介した、探偵と沙織（キョウコ）との関係を、具体的なシーンから見ていこう。キョウコからの最後の依頼を受け、探偵は小樽に行く。駅のベンチに座って考え事をしていた探偵のアップショットの後に、沙織のアップショットが挿入される。探偵のフラッシュバックだ。探偵のバストショットに切り替わる。探偵は呆然とした表情で立ち上がる。沙織のケータイのアップショットに替わる。鳴り出したケータイを沙織が取る。沙織のロングショットに替わる。沙織はケータイを開き、耳に寄せる。ケータイを口元に当てた探偵のバストショットに切り替わる。探偵は「お前が、コンドウキョウコなんだろ?」と尋ねる。しばらく会話を交わした後、沙織は「さようなら」と言って電話を切る。探偵は「沙織ー!」と叫ぶ。

このシーンの映像は、探偵のショットと沙織のショットで構成されていることが分かる。バーの黒電話で会話をするシーンでは、キョウコ（沙織）の姿は描かれなかったが、ケータイで会話をするシーンでは、沙織の姿が描かれるのだ。本作の冒頭のシーンで、沙織が

「ケータイを忘れちゃったみたい」と言って、ケータイを取りに戻る場面があるのだが、「コンドウキョウコ」が黒電話の声と結びつけられているのに対して、「沙織」はケータイと結びつけられているようにも思われる。探偵はケータイを購入し、バーのあるススキノから離れた場所で考え事をするので、つまり黒電話から距離を置くことで、キョウコの正体が沙織だと気づいたのではないだろうか。

吉見俊哉は、電話をしている時、「回線上に成立している世界」と、日常的な場所の世界とは、「リアリティの異なる次元を構成」していると述べている³。探偵はバーの黒電話でキョウコと会話をしている時、日常的な場の世界とは異なるリアリティを、「回線上に成立している世界」に感じていたのではないだろうか。ゆえに、探偵は日常的な場の世界で沙織に何度も会い、その声を聞いているにもかかわらず、黒電話でキョウコの声を知っている時には、その声の正体が沙織であると気づくことができなかったのではないだろうか。探偵にとって「コンドウキョウコ」とは、黒電話というメディアを介することで成立する、回線上の世界の存在だったのである。メディアを介さずに会っていた「沙織」とは、異なる次元の存在だと思われる。

以上の考察から、ボイス・オーバーでの探偵の語り、「コンドウキョウコ」と「沙織」という名前を使い分けているのは、観客に真実を明かさないようにするためだけではないといえるだろう。探偵にとって「コンドウキョウコ」とは、バーの黒電話を使うことでしか接触することができない、回線上の世界のファム・ファタールだったのである。

註

- 1 フィルム・ノワールについては、北野圭介『ハリウッド100年史講義』、平凡社、2001年、135-141頁を参照せよ。
- 2 吉見俊哉『メディア文化論』、有斐閣アルマ、2004年、79頁。
- 3 吉見、前掲書、2004年、205頁。